



ain

2020, Spring/ Summer
A MAGAZINE ALL ABOUT "TILES" No. 02



バロック様式の美しい教会

シチリアは地中海のほぼ中心に位置し、様々な文明が入り組んだ歴史背景から、異国情緒ある独自の文化が育まれてきた。島の南東部にはヴァル・ディ・ノートと呼ばれる地域がある。このあたりで1693年に大地震が発生し壊滅的被害を受けながらも驚異の再建と発展を遂げた8つの街を総称したものだ。再建には当時流行したバロック様式が取り入れられ、美しい装飾や彫刻、建築物などが数多く造られた。当時の繁栄を映した景観を今も遺すヴァル・ディ・ノートは、8つの街並み全てがユネスコ世界遺産に登録されている。

今回僕が訪れたのはヴァル・ディ・ノートのひとつ、ラグーザという街だ。カターニア空港から車で南に約2時間程走ったところにある。

一帯は山々に囲まれた丘陵地帯で石畳みの坂と階段が街中に広がっている。まるで中世にタイムスリップしたかの様なバロック様式で統一された美しい景観はまさに絶景だった。また、街の広さに対し教会の数が多いのも特徴的だ。その中でも旧市街の中心にあるドゥオモ、サンジョルジョ大聖堂を訪ねることになった。

大聖堂の内部に一步踏み入ると、絵画や彫刻、ステンドグラスの装飾に目を奪われる。だがやはりそこはタイル視点が覚醒、床と壁が自然と気になってしまう。特に大聖堂内部の象嵌で円状に施された天然石はとても美しかった。サンジョルジョ大聖堂は245年前に作られた建物でかなりの年月が経っているが、黒と白のコントラストは今見ても大胆かつモダンで、黒の濃淡にもそこはかない奥行きが感じられる。経年変化を経て鋭い光沢があるとても味わい深い石だ。



サンジョルジョ大聖堂の内部



ラグーザ街中の広場

聞けば、これはシチリアで採れるピエトラピーチェという石灰岩だという。シチリアでもこの付近でしか採れない天然石だそうで、確かにこの街ではピエトラピーチェの様な黒や焦げ茶色の比較的濃い色合いの石をよく目にした。この教会に限らずホテルやお店、レストランの床や階段の手すりなど街の至るところに濃色の石が当たり前のように使われていた。シチリアには火山も多く存在するので、天然石の種類も豊富なかもしれない。そんなことを頭を巡らせていると、現地の人々が近くに採石場があると教えてくれた。案内

も兼ねてくれると言うのでシチリアにいるせったく機会、少し足を延ばしてみることにした。

地層に流れる、黒い液体？

採石場はどこにかく広大だった。上から段々状に削り取られた地層断面が見渡す限り広がっている。採掘は横にも下（地下）にも及んでおり深いところでは50m以上も掘り進められている。掘る場所によってある程度のあたりをつけるものの、掘ってみないと実際には何の石が出てくるかは分からないようだ。

実際に地層に近寄ってみると、断面の間から無数に黒い液体が流れている・・・?なんだろう、これは。

黒い液体の正体は、石油。このあたりの地層には特に多く含まれているそうだ。吸水性の高い地層が黒い油分をたっぷり吸収し、割れ目から溢れ出しているとても不思議な光景だった。外気に触れた油は地面まで流れることなく、石の表面で冷えて固まる。実際に冷え固まった破片を手にとると、ゴムの様な柔らかい質感だ。なるほど、こういう特徴を持つ地層だからこそ、濃色の天然石が多く採れるのか。聞けば採掘する場所によっても色は大きく変わってくるそうだ。大聖堂で見たピエトラピーチェの黒もこの石油が含まれたものだった。ちなみにピエトラピーチェはこの地域のみで採ることができる土地特有の石だ。

この採石場では他にもラバストーンと呼ばれる溶岩石も採れる。ピエトラピーチェは削ったり磨いたりして採れたままの黒色を目にすることがほとんど



どだが、ラバストーンは、タイルの様に粉碎加工し焼いてから建築物に使用される。焼く際は、油分の含有量により色の濃淡が変化する。含有量は自然任せ、採れたまま調整はできないのでさながら自然が織りなす色だ。

シチリア島でよく採掘されるピエトラピーチェは殆どの古い建造物で壁材や床材、装飾物として使用されていたのが印象的だった。昔から石材を建築商材として使用してきた背景から、その加工技術の凄さ、装飾品のデザイン性には大変驚いた。タイルにも大理石を使った製品はあるものの今回のようにがっつり石材に触れる機会がなかった為、大変興味深かった。タイルは長期的に見て、メンテナンスを施せば経年的な劣化や意匠性を損なわない。一方で、今回シチリアで見てきた建造物に使用されている石材は経年で角が丸くなり、色がくすんで鈍い艶を帯びていてなんとも味があり、意図的には再現できないような「歴史」というデザインを醸し出していた。今回のシチリア訪問では、石材を通じイタリアの建築文化に触れ町並みを巡ることで、イタリア建築のルーツを感じ取れた。タイルと天然石、それぞれの魅力と美点を学ぶ有意義な旅だった。



横に掘り進め、
同窓の所にたがった空間



オイルを吸い上げ、黒くなったピエトラピーチェ

Special Thanks: Ryuji Fujimura

COLUMN 古今陶材

01. 「The Tile」

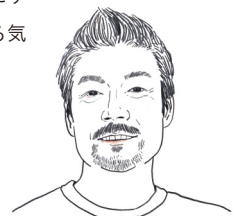
タイルは陶材である。石は石材、木は木材、電気屋さんは電材、水道屋さんは管材。これら建築で使われる材料を建材という。石材を積み重ね石造り、木材を組み立て木造、電材をつなげて電気が通る、管材をつなげて水が流れる。陶材は張られて初めてタイルになると私は思っている。陶材の陶とは焼き物のことである。電材が陶でできていたり、管材もかつては陶管だったりした。ただこれらの部品や部材などとタイルが大きく異なることは、必ず仕上がり材ということである。建築の仕上げには耐久性や装飾性が求められる。太古の昔から焼き物はその優等生であった。しかし、最近のタイルって昔のものとは比べるべくもなく魅力がないように思えないだろうか？タイルの焼き物らしさが失われてはいないだろうか？均質性にとられすぎて本来の生き生きとした姿ではなく、なんとなく魅力や個性が削がれている。これを私はタイルの陶質制限と呼んでいる。

私は陶芸家と画家の間に生まれた。学校に入ると一般的な家庭でないと云われながら育った。名前が変だと指をさされ、左利きも学年で私だけ治さなかった。成人し、イタリア、ギリシャを巡ってロマンを感じタイル職人になってみたものの、日本ではひたすら肉体労働の生活に疑問を感じ、イスラム圏に行きモスクを作りたいと先輩たちに話しても誰からも理解されなかった。日本のタイルが世界一なんだと、日本から一歩も出たことない人たちが口々に言っていた。本来の生き生きとした姿ではなく、なんとなく魅力や個性が削がれるとは、こういった世論に迎合することだろう。つまり、世論に迎合したタイルが生き残っているという現状があり、メーカーは世論に迎合したタイルを作り、世論は世論に迎合されたものしか選べないということがあるのかも知れない。

私は、焼き物は焼き物らしく、陶質制限などせずに、分厚くたっていいじゃないか、垂んてたっていいじゃないか、ムラがあってもいいじゃないかと思う。それを美しく仕上げるのが、我々タイル職人の本懐であるはずだ。陶質制限という言葉から連想したわけだが、ダイエットという語がある。では The Diet という単語を読者の皆様はご存知だろうか。国の最高機関である国会のことである。国会議事堂は The Diet Building、国会議員は Member of the Diet だ。これはいわゆるダイエットと同じ語源、日常の暮らしを豊かにすることからきている。つまりダイエットの本質は糖質制限でないはずだ。しからば陶質制限されていない焼き物らしいタイルを the tile と呼ぶのではないかな。なぜなら長い人類の教訓としてタイルに、いや、The Tile に日常の暮らしを豊かにするという役割が求められている気がしてならない。

白石 普 Shiraisi Amane

(株)Euclid 代表取締役。芸術一家に生まれ育ち幼少より美術、芸術に親しむ。20歳のときに1年間イタリア・ギリシャ各地を歴遊、ローマ遺跡やビザンチン建築に興味を持ちタイル職人となる。のちイスラムの幾何学モザイクに魅せられモロッコ・フェズのモザイク工房で2年間修行、モスク建設などに携わる。空間をふまえたタイルをデザインし、制作、施工のすべてを行う異能のタイル職人としてタイル業界にその名を轟かせている。



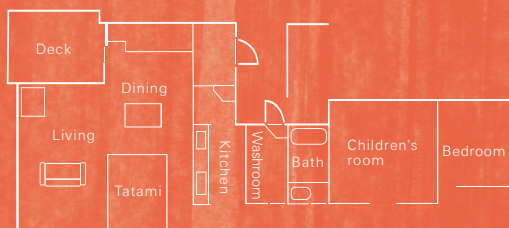


神戸市 北区



山に囲まれた自然豊かな静かな地に、一軒家を建てることにした康之さん、奈々さんご夫妻。この地域は康之さんが生まれ育った場所でご実家があり、ご両親から土地の一部を譲り受けることになりました。元々地元への想いが強かった康之さんと、平屋に住みたいという奈々さんの想いが重なり、家づくりがスタートしました。

家族構成
康之さん(35) 奈々さん(35) 慶くん(5) 達くん(4)



NEW LIFE

家族とタイル、新しい暮らし。

暮らし方がとても見直される時代になりました。目まぐるしく変化する社会情勢や自然災害などの影響は、生活や住まいにより本質的な豊かさを求めるムーブメントのきっかけとなりました。特に「家」においては、機能を横断した効率の良いスペースの使い方や、それぞれの機能に応じた質が高く求められるようになってきています。今、新しい家をつくる。そして空間にタイルを使用することを決めた2家族を訪ねました。空間をいかに創造的に使い、家族との時間をどう豊かに過ごすか。居心地や質を求めた結果のひとつに、タイルという選択をした家づくりの現場です。今回はタイルを張っていく施工工程から、空間が出来上がるまでの過程を追いました。さて、空間の中で大切にしたい価値観や理想の暮らし方とは。

お二人にとってはもちろん、何もかもが初めての家づくり。まずは入念にリサーチをそこから始めました。設計はInstagramで見つけた建築家の完成見学会に足を運び、対話を重ねた上でお願いすることにした。

康之さんと奈々さんが今まで暮らしていた家は狭くはありませんでしたが、新しい暮らしにおいて解決したい要望をいくつか持っていました。例えば、家事動線や、採光面など。また今回は緑の多い環境ということもあり、周囲環境との調和も大切に考えていました。要望を整理し取捨選択を行なった結果、大切にしたい条件は、光あふれるリビング、木の温もり、そして平屋であること。



設計プランを何回も変更しながらたどり着いた形は、大きな屋根が象徴的な、すっきりとしたシンプルなデザイン。家族が集まるリビング、ダイニングスペースには大きな窓がいくつも設けられ、1日の流れと外との繋がりを感じることができる。内装材には天然木が多用されることになりま



したが、一方で奈々さんはキッチンの床をタイルにしたいという憧れがありました。ただ、調整を重ねていく上で予算面に正直少し足踏みも。そんな中、タイルを使ったことのある知

人から機能性やメリット、デメリットを聞く機会に恵まれました。行動の早い奈々さんは聞いてすぐショールームに足を運びました。最も響いたのは、タイルのデザインの豊富さ。魅力的なデザインの数々に色々張ってみようかなという想いが一層強くなりました。また、掃除が苦手な奈々さんにとってお手入れに優れた点も採用する後押しになりました。結果的に康之さんと奈々さんがタイルを張る場所に選んだのはキッチンの床・壁、洗面室壁、そしてトイレ壁という3箇所。キッチン床は憧れが強かったので、直感でエッジングがかった雰囲気的设计を。また、壁は前の稼働棚とのバランスを考慮し、表面の凹凸が作る陰影がざりげない存在感を放つ白いタイルを選びました。

昔からレストラン、カフェ巡りの合間にトイレをチェックすることが大好きだった奈々さん。新しい家の洗面やトイレの雰囲気にも特段こだわりたいと考えていました。洗面室の壁には清潔感のある柔らかな水色をベースにしたタイルの雰囲気にも特段こだわりたいと考えていました。洗面室の壁には清潔感のある柔らかな水色をベースにしたタイルの雰囲気にも特段こだわりたいと考えていました。洗面室の壁には清潔感のある柔らかな水色をベースにしたタイルの雰囲気にも特段こだわりたいと考えていました。

康之さん、奈々さんご家族はまるで絵に書いたような仲の良さが魅力的なご一家です。



その奇を衒うことのないナチュラルな価値観がそのまま反映された家の中に、タイルというこだわりをプラスしたことで、個人で過ごす時間も想像以上に楽しめる空間に仕上がりました。康之さんと奈々さんが出した家づくりで大切にしたい要望に書き添えられていた“帰ってくるのが楽しみになる家”、まさにその言葉通りの家が完成しました。



施工の様子



施工スタート！これからタイルを含む内装材が入ってきます。



壁に張る前の段階ではまだプロダクト。積み重ねるタイルたち



張る場所に合わせて手作業でタイルをカットしていきます。



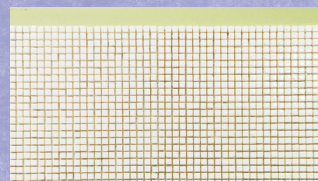
ディテールに合わせてタイルをカット。これぞ職人技。



下地の壁に接着剤を均等に塗っていきます。



接着剤が乾かないうちにタイルを張ります。均等な目地幅を調整するのにも人の手です。



接着剤が乾かないうちにタイルを張ります。均等な目地幅を調整するのにも人の手です。



タイルに目地を上から塗布します。目地に凹凸が出ないようにたっぷり塗っていきます。



塗布した後、タイル表面を拭き取ります。



さらに目地を約1日乾燥させ完成！

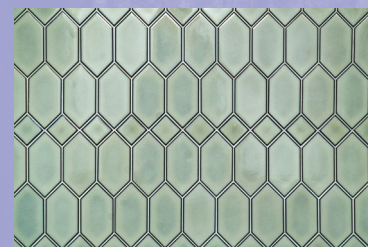
そしてなんとこのご夫婦、共に建築設計を生業としています。普段は住宅や施設など建物を作りたい人々を相手に設計を行う潤さんと直子さんですが、自分たちが暮らす空間は自分たちで作ってみたいという思いがありました。施主と設計の二役を同時に担えるのはまさに建築家ならではの醍醐味。斯くして建築家による、建築家のための自邸作りが始まりました。

マンションのリノベーションはまず躯体の確認を行い、どの部分を遺し新たに調理可能な部分でどこかを調べる必要があります。確認すると住戸のちょうど真ん中に空間を真っ二つに隔てる大きな界壁がありました。潤さんと直さんは、その壁を起点にLDKの機能を持たせる生活面(A面)、そして暮らしながら使い方を決めるアトリエ面(B面)というスペースに分けることにしました。住まう中で子供の成長や職場の変化など変化はつきもの。柔軟に対応できる余白をB面を持たせることにしました。



水まわり空間の豊かさを大切にしたいかったお二人は、よりプライベートの性質が強く、水まわりが集中するA面スペースにタイルを使用することにしました。タイルは他の建材より表情豊かにできるのではというアイデアを持っていました。浴室はせっかくなら素材をしっかりと使ったホテルライクなテイストにしてみようと、採用したのは変形六角形の軸葉の色ムラが特徴的なタイルでした。また同シリーズの正方形タイルをアクセントと

してライン使いに。



洗面室と浴室はカーテンで仕切られるだけの連続した床となるため、床タイルは同じシリーズで内装用と外装用を張り分けました。タイルは人の好みも最も反映されるマテリアルと感じていた潤さんと直子さん。決して広くはないスペースでしたがこだわりと品が感じられる上質な空間に仕上がりました。

そしてキッチンに使用したのはマスタート色のタイル。ピースごとにあるほのかな色ムラとマットな質感が壁一面を覆い、一段とモダンな印象になりました。ステンレスの厨房の雰囲気を持つフレームキッチンのセットとなる壁面に印象的なタイルを張ることでよりキッチンのプロダクト性が際立ちます。

自邸だからこそ思いっきりタイルを使ってみよう。その想いは、浴室、洗面、キッチンそれぞれに個性をもって反映されました。結果的にタイルによってA面、B面の対比が際立ち、全体の構成の要にもなりました。潤さんと直さんは共働きの子育て世代なので、平日

東京都 世田谷区



都心、夫婦共働き、子育て。スピードの早い環境の中で、多忙なスケジュールを送る潤さん、直子さんご夫妻は結婚後、社宅住まいでした。オリンピックに向けた建物の取り壊し退去に伴い、新しい居住スペースを考えることに。検討を重ねた上で潤さんと直さんが出した結論は、築50年を超えるマンションをリノベーションするという選択でした。

家族構成
潤さん(33) 直子さん(35) 瑞くん(3)

はコンパクトな生活が通っています。しかし、休日は家での過ごし方に夢を持ちたい。ワークライフバランスと今後の生き方や価値観が柔軟にシフトするように、空間にも可能性をのこし家族の生き方を実践できるスマートでクリエイティブな自邸が完成しました。





シンプルな
家にアクセントを思い、
張ったタイルが図らずも全体でうま
くまとまった感覚がありとても満足して
います。タイル＝レトロな台所や水まわり
だけのイメージが強かった点もガラッとイ
メージが変わりました。
家づくりに関しては想像以上に大変で辛くな
ることもありましたが、一つひとつこだわりが
詰まった家が完成し、嬉しさと感謝でいっぱい
です。大好きなものと自然に囲まれた新
しい家で美味しい珈琲をゆっくり飲み
ながら家族時間を楽しみたいと
思っています。

by YASUYUKI & NANA

COMMENT

壁の少ない
シンプルな構成のプランです
が、タイルによってそれぞれの場所
がユニークなキャラクターを持ち出し
空間に豊かな変化を作ってくれました。
施主であり、設計者である立場での設計
作業はとても時間のかかる作業でした。
でも、2人でああでもないこうでもない
案を練る時間は思い返せばとても楽
しい思い出です。また機会があれ
ば(?)自邸を設計してみたい
です。

by JUN & NAOKO

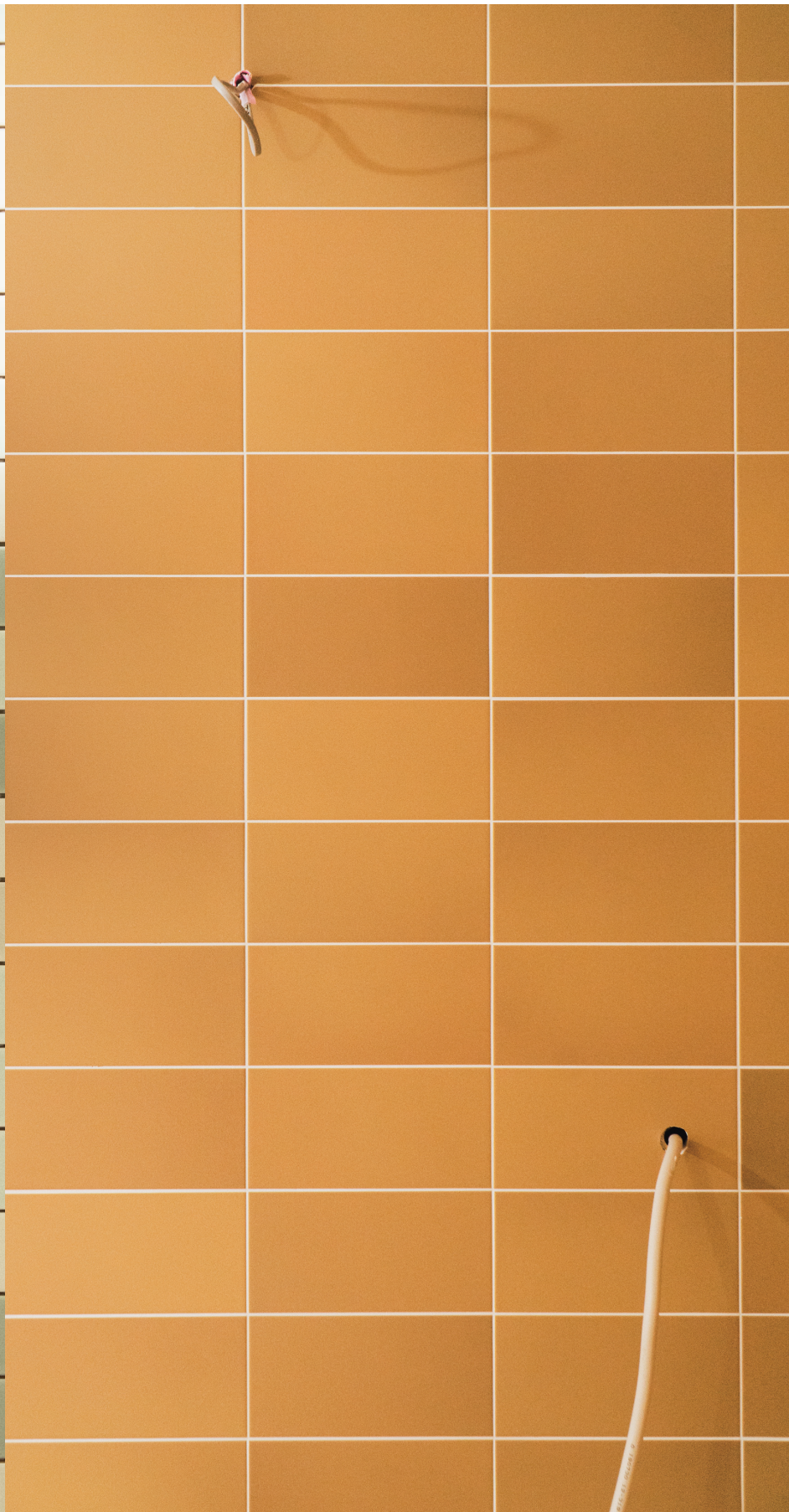


キッチン：内装壁タイル Hi-Ceramics「WIG WAG」内装床タイルHi-Ceramics「Chateau」
洗面室：内装壁タイル Hi-Ceramics「Westport」 トイレ：内装壁タイル Hi-Ceramics「Kolmio」

工務店：有限会社ビームスコンストラクション タイル施工：●●●●●●
家づくり構想から引渡しまでの総期間：2018年～2020年2月

キッチン：内装壁タイル Hi-Ceramics「15 Thirty Color」洗面室：内装壁モザイクタイル BISCUIT「Micro Mosaico」
浴室：内装壁タイル Hi-Ceramics「Muschel」内装・外装床タイルHi-Ceramics「Beren」

工務店：合同会社ウェルカムトウドウ タイル施工：有限会社 ヤザワ Double Y
家づくり構想から引渡しまでの総期間：2019年2月～2020年3月



TRAVEL

貼り巡る旅

Vol.2



Photo by Takumi Ota

長野県、松本。

悠々と佇む北アルプスに囲まれた緑豊かな街中に、minä perhonen (ミナ ペルホネン) 松本店はあります。
ミナ ペルホネンは、デザイナー菅川明さんが描くハンドドローイングを主とした图案のファブリックから、服作りをはじめ家具や器など日常に寄り添うものまで幅広く展開するブランド。オリジナルの图案には自然や動植物の美しさや可憐さ、日常のふとした風景などがエッセンスとなり多彩に描かれます。繊細な刺繍を用いた創造的な世界観は一過性の流行にはない普遍的な価値を持ち、着る人の心をワクワクさせる「特別な日常服」として多くの人を魅了し続けています。物づくりに対する真摯な姿勢や丁寧に紡がれるブランドフィロソフィーは店舗空間にも活かされ、ここ松本店でも丹念に体现されています。
松本店は100年以上もの時を重ねた古い建物を改装して作られた店舗。ファサードにはこっくりと落ち着いた色のタイルが張られ、菅川さんの描いた木々のイラストと共に道行く人の目を自然と引きまします。このタイルは岐阜県 多治見で「ギャルリ百草」を主宰する陶作家、安藤雅信さんが手がけたもの。松本店のためだけにオリジナルで制作されました。一枚一枚異なる織部焼の焼きむらと松本の自然に溶け込むような深い緑色は奥行きのある美しさを持ち合わせています。時を経た建物に静かに寄り添うタイルは1日の自然光の流れによっても昼夜表情を変え、建物の魅力を高めるだけでなく周囲の景観とも自然に調和しています。
元々は薬局だったというこの建物、店内には昔から使用されていた引き出しのたくさんついた

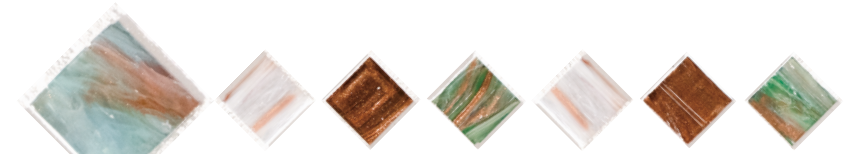
薬棚や、カウンターなど一部がそのまま引き継がれ使用されています。その趣ある棚に、今は新作コレクションの洋服やバッグ、小物のほか自身も物づくりのひと時を楽しめるインテリアファブリックが並んでいます。薬局だった当時を知っている方が想い出を懐かしみながらお話されることもあるのだとか。近所からふらっと歩いて来る方、長野県内はもちろん旅行を兼ねて県外からも多くの方が訪れるお店には昔から人と人が出会う場所であったがゆえに温かな空気が流れています。一年を通して四季折々に魅力ある松本。この地を訪れるたびに、ふと寄りたくなるお店です。



Photo by Takumi Ota

minä perhonen 松本店

長野県松本市大手2-4-26
0263-38-0137
11:00-18:30 水曜休 ※祝日の場合は営業
www.mina-perhonen.jp



今号の表紙タイル
Karussell



アメリカで手作業で作られ、
ピースごとに温もりが感じられるクラフトタイルです。



平田タイル ショールーム



東京 東京都中野区本町1-32-2 1F
Tel 03-5308-1135 Open 10:00-17:00 水曜・祝日定休
名古屋 愛知県名古屋市中区錦2-20-8 東栄ビル2F
Tel 052-218-3187 Open 10:00-17:00 水曜・日曜・祝日定休
大阪 大阪府大阪市西区阿波座1-1-10 1・2・3F
Tel 06-6532-2002 Open 10:00-17:00 水曜・祝日定休

ご来場には、公共交通機関をご利用ください。定休日は上記のほか、夏季・年末年始が含まれます。日程についての詳細は各ショールームへお問い合わせ、またはホームページよりご確認ください。

www.hiratatile.co.jp

HIRATA TILE

[aiu] 発行年月日：2020年6月1日 第2号発行 制作：aiu編集部
発行元：株式会社 平田タイル 大阪市西区阿波座1-1-10 06-6532-1284

